

ハワイで考えてみる日本の経済

神戸大学経済経営研究所 富浦 英一

「ハワイ」と聞いて、まず思い浮かぶ言葉は、常夏の島、観光、ビーチ、ショッピングと言ったあたりでしょうか。ハワイと深刻な経済のテーマは結びつきにくいというのが普通の印象でしょうが、ここでは、ハワイについての筆者の個人的経験をきっかけに、少し日本の経済について考えてみたいと思います。

どの州ともつながっていない“INTERSTATE”？

ハワイ以外の米国ではまず聞かないにも関わらずハワイで頻繁に耳にする英語に、“MAINLAND”という単語があります。ハワイ以外の米国本土という意味ですが、ハワイがそれ以外の米国と異なっている点が如何に多いかをよく示す言葉だと思います。ちなみに、ハワイの道は当然他のどこの州ともつながっていませんが、米国本土にならってハワイでも、高速道路のことを“INTERSTATE”と呼びます。

経済を見ても、ハワイは、日本の景気に大きく左右されるなど、米国本土とかなり異なります。日本にいと、当然のように、円の対米ドル為替レートの変動を毎日のニュースで知らされるわけですが、米国にいと、為替相場自体がニュースになることはまずありません。輸出や米国経済に対する日本経済の依存度はもはや低くなっていますので、対米ドル為替ばかりに日本で注目が集まるのも不思議な感じがします。いずれにせよ、国によって、注目される指標が大きく異なるということは、その国の人々の行動にも影響するので興味深いことです。ハワイの場合には、為替レートは時差で5～6時間も遠く離れたWall StreetやWashington D.C.でハワイの景気などお構いなしに外生的に決まってしまう、ハワイで最も注目される指標は、旅行者の到着数です。

「特異」な国？

ハワイを訪れる旅行者のうち、日本人は、米国本土からの旅行者に次いで多数を占めていますが、日米の旅行者の行動様式は異なる点が多いようです。日本人は、米国人に比べ支出額が多く、なかでも、ファッションや土産関連では、日本人の支出は米国人を数倍上回る「得意客」です。とはいっても、日本人観光客は、専らオアフ島、なかでもワイキキに集中しており、カウアイ島、マウイ島といった neighbor islands に行けば、ゆったりと過ごす米国人ばかりで、ここはやはり米国なのだと再確認することになります。日本人観光客は日本語のできる店員のいる日本人好みの店が立地している所に群れ、日本人向けビジネスは日本からの観光客が群れる所に集中して立地するという循環が機能している印象です。

一見して日本の「特異」な行動に見えるものであっても、経済学による説明が可能であることは多いと思います。例えば、対外直接投資が日本から米国向けの方に大きく偏っ

ている現象について、これまでも日米貿易摩擦の経済分析に実績の多いハワイ大学の Theresa Greaney 準教授は、経済学で注目されている社会的ネットワークの効果に着目して理論的に説明する論文を最近発表しました（"Reverse Importing and Asymmetric Trade and FDI: A Network Explanation," *Journal of International Economics* Vol.61(2), 2003, pp.453-465）。華僑や系列など、互いに良く知り合った関係での取引が重視される国（日本、韓国、中国、イタリアなど）と、市場でのスポット取引を重視する米国という対比が説明のカギになっています。

そもそも、何が「特異」なのか決めるのは難しいことです。米国は、従来、移民を歓迎する国という意味で世界でも「特異」な国との印象を永らく持たれていましたが、「9月1日」以来、大きく変貌しました。いまや、ビザの審査は、非常に長い時間をかけて慎重に行われ、長年続いてきた米国への留学生数の増加傾向は遂にストップしました。各大学も、留学生や客員研究員の個々人に関する情報の入力に神経をとがらせています。これほど警戒してもまだ決して十分とは言えませんから、米国も、この面では、もはや「特異」でなくなったと言えるでしょう。

日本と似ているハワイ？

「特異」なのかどうかの議論を離れても、ハワイには、日本経済を考えるきっかけになる点が意外なほど多いと思います。

まず、ハワイは、物価水準が高いため実質的な所得が低く、特に不動産価格が全米有数の高水準にある点で、日本と似ています。土地が狭い島で、遠く離れた米国本土や日本からほぼ全ての物資を輸送する必要があるため、物価が高くなるのは当然ですが、ハワイに永住している方々は、この物価の高さを楽園の気候を買っているようなものだ（心底納得している、あるいはそう自分に言い聞かせていると）言っていますが、それでは、日本人は何に余分な金を払っていると思えばよいのでしょうか？

それから、貿易や対外経済が重視されてきたという点でも、日本と似ています。ハワイは、世界市場で圧倒的なシェアを誇ったサトウキビやパイナップルの輸出向け生産や、捕鯨船や客船の寄港地として、かつて繁栄しました。しかし、賃金の高騰や、代替品を生んだ技術革新（鯨油にかわる原油の採掘が米国本土で始まったこと、航空機による旅行が普及したこと）によって、こうした栄華は永続しませんでした。急速に経済発展・産業構造転換を遂げてきた日本経済にとっても、他人事ではない歴史だと思います。

ハワイ経済の主力は、ホテル、飲食店、輸送、不動産等、広義の観光関連産業に移っていますが、今日の活況もいつかは転機を迎えることでしょう。観光客の嗜好は世につれ移り変わるものですが、比較優位を今後も支える確固たる要素は、ハワイの場合、結局のところ、一年を通じて快適な気候と、それに育まれたカルチャーではないでしょうか。それでは、日本の場合は、何でありましょうか？

（注）本稿は、六甲台後援会の助成を一部受けた在外研究での個人的印象をもとにしています。改めて関係の方々に感謝します。